

HOT・ホッと・くまもと：夏号

幸山政史通信 2012.Summer vol.26

九州北部豪雨が熊本を襲いました。
被災された皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

熊本市長 幸山政史

東京で受けた第一報

7月12日午前4時ごろ、危機管理防災室からの「合志川が氾濫する可能性が非常に高い」との電話で目が覚めました。

その時は、国に対する要望活動のために前夜から上京しており、東京のホテルでその一報を受けました。その後の断続的に入ってくる情報では事態が悪化する一方で、白川まで氾濫の危険性が高まり、自衛隊への派遣要請を指示せざるを得ないような状況に至りました。東京と熊本とで連絡を取り合うか、とにかく熊本に戻るか判断に迷いましたが、その時点で当日の日程を全てキャンセルし、できるだけ早い熊本行きの変更に羽田空港まで急ぎました。

飛行機に乗り込む直前まで情報収集に努めましたが、状況は改善せず、白川の流量ピーク

が予想される時間は飛行機の中。これまで何回も熊本⇌東京を約1時間半かけて往復しましたが、その時ほど長く感じたことはありませんでした。

危機管理に新たな課題

結果的に中心部は何とか溢水を防ぐことができましたが、合志川流域では植木温泉周辺、白川では龍田地区を中心に、広範囲にわたって家屋の全半壊や浸水被害、橋梁や道路の破損、農作物やハウス等施設の甚大な被害が発生しました。

熊本に戻りすぐに災害対策本部を開き、その直後に最も被害の激しかった「リバーサイドニュータウン」(熊本市北区龍田陣内)を訪れましたが、泥や流木を含んだ大水が地区全体を覆い、筆舌に尽くしがたいような光景が目の前に広がりました。規模の違いこそあれ、東日本大

復旧から生活再建へ 全力で支援・整備を

震災による津波被害と同じような状況です。被災された方も、一瞬にして泥水に飲み込まれたわが家を前にして、どこから手をついたらよいか途方に暮れておられました。

私たちはよく「昭和28年の白川大水害を教訓に」と言ってきましたが、これまで経験したことのないような大雨に見舞われ、情報伝達のあり方を含めて再び大きな課題が残りました。現在はその検証作業を進めているところです。

皆さんの支援が復興への活力にあれから1カ月が経過しようとしています。被災者の皆さんは復旧から生活再建に向けて懸命に努力されています。私たちもできる限りの支援を行ってききましたが、その大きな支えとなつたのは、地域住民や全国各地から集まっていたボランティアの皆さんでした。そして、その中でも今回は特に高校生や大学生等の若い力が存分に発揮され、被災地に勇気と活力が注ぎ込まれました。

今後も復旧・復興に全力を尽くすとともに、治水対策の強化、情報伝達・収集体制の整備等に努めてまいります。皆さんのご協力を何とぞよろしくお願い申し上げます。

